

# プログラムの曲目解説

定期演奏会のプログラムに載せる曲目解説が入手できましたので、一足早くご覧になってください。

## ◇シューマン：歌劇「ゲノフェーファ」序曲 by 山江 (Fl)

今年はヴェルディとワーグナーという「イタリアオペラ」と「ドイツオペラ」を代表する作曲家が揃って 200 歳を迎えることでオペラ界は盛り上がっています。彼らが生まれるほんの 128 年前には、バロックの 2 大巨星バッハとヘンデルがやはり同じ年に誕生する奇跡があったばかり、人類の歴史では時々こんなすごいことが起こります。

しかし、ドイツ人であるヘンデルが作ったのが紛れもない「イタリアオペラ」だったように、かつては「オペラ」と言えば「イタリアオペラ」のことでした。名実ともに「イタリアオペラ」と肩を並べることのできる「ドイツオペラ」が完成するには、ウェーバーを経てワーグナーの登場を待たなければならなかったのです。

確かに、ワーグナー以前のドイツ・ロマン派の巨匠、シューベルトもメンデルスゾーンも、そしてシューマンもオペラは作っていました。しかし、今日では彼らの作品はほとんど顧みられることはありません。シューマンが 1849 年に完成させた彼の唯一のオペラ「ゲノフェーファ」も、本日の指揮者山下一史氏によって日本初演が行われてはいますが、到底オペラハウスのレパートリーに入るようなものではありません。ただ、十字軍に出征したブラバントの領主が、彼の留守中に新妻が不義をはたらいたことに

激怒して刺客を送るも、後に誤解に気づかされ、許しを乞うて辛せに暮らす、といういかにもロマンティックなシナリオを見事に音楽的に表現した序曲だけは、折に触れて演奏されることがあります。

ソナタ形式によるこの序曲、非常にゆったりとした序奏の冒頭は、いかにも不安定な情緒をかきたてる「ソ・シ・レ・ファ・ラ」 という「フラット・ナインス」の和音です（譜例 1）。序奏の最後に現れる、「ラメント」と呼ばれる悲しげな下降音型の断片は、アップテンポに変わる主部では、提示部の第 1 主題となって切ないストーリーを語ります（譜例 2）。そこに第 2 主題として聴こえてくるのが、ホルンによる勇壮なファンファーレ。これは、領主ジークフリートのモティーフでしょうか。その後には常に新妻ゲノフェーファの貞淑さを思わせるような優雅なモティーフが続きます（譜例 3）。このセットは全部で 4 回登場しますが、2 回目の展開部ではこの二つのモティーフの間を邪魔者が引き裂きます。それが、再現部とコーダではまた仲良く寄り添っているのですから、思わず「ゲノフェーファ、よかったね」とつぶやかずにはいられません。

シューマンの隠れた逸品を、ぜひご堪能ください。

(※プログラムには譜例はありません。)

## ◇ベートーヴェン：交響曲第 1 番 by 宮本 (Vn)

この交響曲は、1799 年から 1800 年初めのベートーヴェンがちょうど 30 歳のときに完成されました。30 歳までに多くの傑作を世に送り出していたモーツァルトやシューベルトに比べると大器晩成と言えます。交響曲第 1 番というわりには短期間で作曲された印象がありますが、ピアノ協奏曲やヴァイオリン協奏曲の作曲にも着手していたベートーヴェンは、おそらくそれ以前から準備し構想を練っていたはずで、またこの頃、故郷のボン市を離れて芸術の都オーストリアのウィーン市に移り住み、ハイドンに師事して作曲法の研鑽を積んでいたようです。1800 年 4 月 2 日にベートーヴェン自身による指揮で初演されましたが、同時に演奏されたピアノ協奏曲は彼自身が独奏をこなすという意気込みようでした。この交響曲はそのようなベートーヴェンの若き時代の作品ですが、古典交響曲としては創造性に溢れ十分な完成度を誇っています。

### 第 1 楽章 Adagio molto - Allegro con brio

典型的なソナタ形式ですが、作品冒頭の短い序奏部は不協和音で始まるために当時批評家から大いに非難されたそうで、それほど独創的であったとも言えます。第 1 主題は第 1 ヴァイオリンによって徐々に追いつまれるような形で始まり、低弦楽器と管楽器との掛け合いのなか進んでいきます。オーボエとフルートで奏でられる第 2 主題は、弦楽器を伴って第 2 楽章を予感させる大変優雅な旋律となっています。展開部はベートーヴェンの先生であるハイドンを思わせる転調の連続で進行し、圧倒的なスケールとなって再現部が奏でられます。

### 第 2 楽章 Andante cantabile con moto

ソナタ形式の緩やかなアンダンテで、ウィーンの宮殿に住む貴族の典雅優美な日常を思わせます。ゆったりとした時間が刻まれているかと思えば、厳格な対位法的手法によってベートーヴェン

らしい力強さが表現されます。途中、ティンパニやトランペットによって表現される馬に乗って走っているかのような軽快なリズムは、展開部では弦楽器全体のアクセントを伴ったより大きな動きへと引き継がれます。再現部はチェロとコントラバスによって新たに刻まれる時間と共に進んで行きますが、今度は効果的に装飾音符も使用されており、より洗練されたものになっています。

### 第 3 楽章 Menuetto e Trio. Allegro molto e vivace

この楽章にはメヌエットと書いてありますが明らかにスケルツォです。これ以前の 1796 年には第 2、第 3 ピアノ・ソナタにおいて完全にスケルツォの作品が出版されていますが、舞踊調の 3 拍子のテンポをもつ急速調メヌエットとトリオという、初めての交響曲にして革新的なものとなっています。途中から入ってくるティンパニは、古典交響曲に相応しい躍動的な効果として働いています。トリオでは、ゆったりとした流れの管楽器の旋律が、ヴァイオリンの速い動きとの掛け合いで進み、舞踊調の曲全体に一層の優雅さを与えています。

### 第 4 楽章 Adagio - Allegro molto e vivace

最初のト音の全奏ののち、静寂の中から上行的スケールを第 1 ヴァイオリンが 5 回奏し、6 回目で第 1 主題へと入って行きます。ハイドンの弦楽 4 部合奏手法をフルに活用して作曲されており、まるで運動会の徒競走の音楽を思わせるような低音楽器の動きも加わって一端盛り上がりを見せます。その後、第 1 ヴァイオリンのわずか 2 小節間の細かい音符で急に緊張が緩んだかと思えば、リズムに体を思わず合わせてしまうような何とも可愛らしく優雅な副主題が新たに奏でられます。形式はソナタ形式で構成されていて、オーボエとホルンのファンファーレのなか、この交響曲の終末を迎えます。

## ◇ショスタコーヴィチ：交響曲第5番 by 鈴木 (Tb)

今回のメインに据えましたこの曲、クラシック好きの方ならお馴染み、そうでない方でも、例えばドキュメンタリー番組の衝撃シーン等で使用されるなど知らずと耳にする機会も有るかと思われます。

この、ショスタコーヴィチ(1906-1975)の作品の中でも知名度 No.1 の「タコ5」ですが、その成り立ちには「曰く」が付きまとうのです。

幼少よりピアニストの母親に音楽の英才教育を受け、音楽学校の卒業制作として19歳にして交響曲第1番を作曲し「モーツァルトの再来」とまで讃えられたショスタコーヴィチは、比較的小規模な第2番、第3番を経て1935年に第4番の作曲に着手します。

この第4番は彼の初の本格的な交響曲として、それこそ溢れ出るアイデアを沢山詰め込んだ意欲作となり、そしていよいよ翌年暮れに初演日を迎えました。が、なんとそれを彼自身がリハーサル直後にキャンセルしてしまったのです(初演は30年後に無事行われました)。

当時ソビエト連邦はスターリンの専政下であり、その手は芸術分野にも及んでいました。要するに政府の意にそぐわない、前衛的な表現などをすれば批判の対象となり、最悪は逮捕・処刑にまで至る、というものだったのです。

すでに歌劇などで目を付けられていたショスタコーヴィチは身の危険を感じ、このような行動を取ったとされています。

その直後から、この第5番の作曲が始まりました。交響曲としてオーソドックスな形式、そしてベートーヴェンから続く「苦悩から歓喜へ」といったテーマ性を持たせたもので、翌年の初演時には政府関係者から絶賛を浴びることとなりました(この部分で我々ファンからは「体制迎合の曲？」との論点を持ち上がります)。

ショスタコーヴィチ没後の1979年、「ショスタコーヴィチの証言」なる書物が出版されます。彼が生前「回想」として話したものをソロモン・ヴォルコフなる人物が編んだものですが、自身の作品に込めた真意や取り巻く人々への批判など、かなり衝撃的な内容となっています。

で、この第5番については、終楽章の歓喜は「強制された喜び」との記載が有るのです！表向きは政府を称美しつつも裏では舌を出していた、と言うことになりますね。もっともこの本自体の全部または一部の真偽については出版時から現在までも論争が続いており、未だ結論は見えてきていないのですが…。

…曲紹介でネガティブ寄りな内容を書いてしまいましたが、楽曲そのものについては、そこはショスタコクオリティ！！緻密な計算と構成力により人々を惹きつけるものとなっているのは昨今の演奏機会の多さでも証明されています。前段のエピソードは「スパイス」としてお楽しみください。

第1楽章：冒頭の苦悩から葛藤が広がり、解決を見ないまま終息する

第2楽章：舞曲風のスケルツォ、ユーモアか、アイロニーか…？

第3楽章：初演時すすり泣きを誘った、悲しみに満ちたラルゴ

第4楽章：重々しい主題がみるみる展開し、終盤ようやく「歓喜」へ

さて、今宵の演奏、皆様にはまごう事無き歓喜が映るでしょうか？それとも強制された喜びと聞こえるでしょうか？

蛇足ですが「20世紀最大のシンフォニスト」ショスタコーヴィチは全部で15曲の交響曲を残しました。戦争がテーマの7・8番、革命を描いた2・11・12番、変化球の「第9」など、およそ一筋縄ではいかない曲が並んでいます。興味を持たれた方は是非足を踏み入れてみては？！

### 「ゲノフェーファ」の譜例

(譜例1)

(譜例3)

(譜例2)